



とびっくす No.106

(本誌はホームページでもご覧いただけます。http://www.pref.shimane.lg.jp/suigi/)

天然アユの遡上が好調です！

5月28日の高津川を皮切りに県内各河川でアユ漁が解禁となりました。今年は天然アユの遡上
が好調で、県内外から訪れた多くの愛好家で久しぶりににぎわいを見せています(図1)。

アユってどんな魚？

アユは「清流の女王」とも呼ばれる独特の香りを持つ魚で、初夏を代表する味覚の一つにあげ
られます(図2)。海で育った稚アユは3月中旬から5月下旬にかけ、川に遡上し、石などの表面
に生える藻類を食べて成長します。そして、10月から12月上旬にかけて中～下流域の砂利に産
卵し、1年で一生を終える年魚です。産卵後、卵は10日から20日ほどでふ化しますが、ふ化し
た仔魚は川の流れて海へと下ります。海に下った仔魚は翌年の春まで海で成長し、再び川
を遡上します(図3)。



図1 アユの友釣りを楽しむ愛好家たち



図2 アユ

近年の天然アユ遡上状況

島根県水産技術センターでは、県西部の高津川をモデル河川として、天然アユの資源状況について調査を行ってききましたが、平成25年頃から徐々に天然アユの遡上量が減少し、平成27年以降、極めて低調になりました。高津川のみならず、県下各河川でも天然遡上魚の減少が確認されました。その後、しばらく天然遡上量は低迷し、各河川では種苗の放流によってアユ資源を維持しなければならぬ状況が続いていました。こうした中、高津川では昨年からの天然遡上回復の兆しが見え、今年は久しぶりに多くの天然アユが川を遡上してきました(図4、図5)。

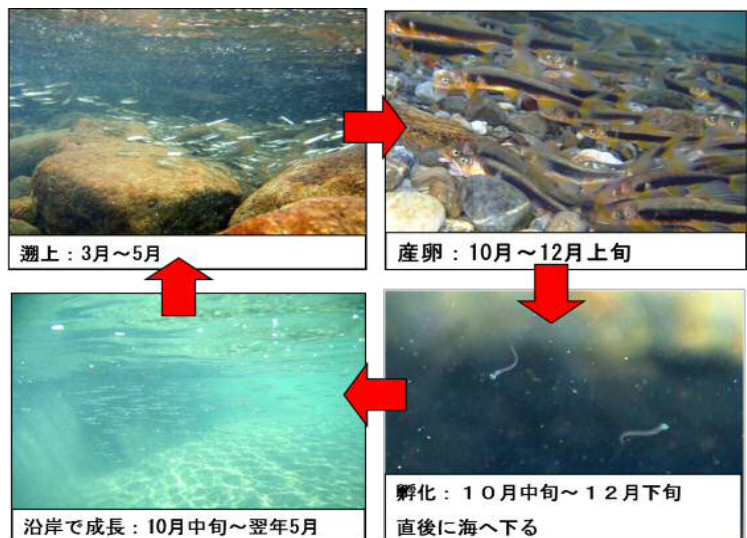


写真: 高橋勇夫氏提供

図3 アユの一生

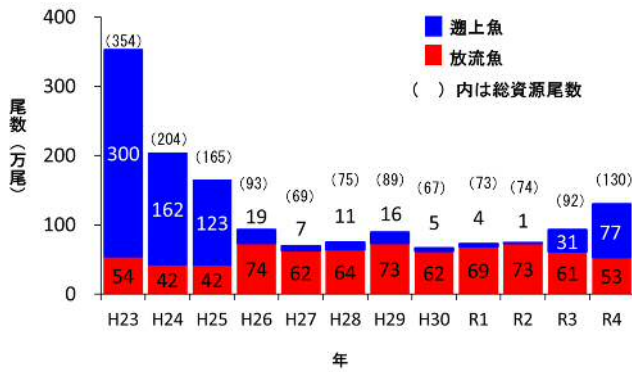


図4 高津川におけるアユ資源状況の推移



図5 遡上するアユの群れ

なぜ天然アユの遡上が増えたのか？

ふ化後に海に下ったアユ仔魚の生き残りに影響する環境条件は、海水温や餌となるプランクトンの量などと言われています。せっかくふ化しても下った海の環境が合わなければ成魚よりも弱い仔魚は生き残ることができません。

島根県におけるアユの産卵期は10月から12月初旬と他の川魚よりも長くなっています。その理由として、比較的長い期間にわたり分散して産卵し、ふ化した仔魚が断続的に海に下ることで、環境条件が変動しやすい海での生き残りを増やそうというアユならではの生存戦略と言われています。海での生き残りが多ければ翌年の遡上の多さにつながることから、昨年は仔魚の降下時の環境条件が良かったと考えられます。

さらに、アユの減少が見られ始めた10年ほど前から各河川の漁業協同組合ではアユを増やす努力を続けてきました。高津川では親魚を守るための禁漁区、禁漁期の拡大、産卵場造成、江の川ではそれに加えて親魚降下対策や置き土などが実施されており、今年はそれらの努力がようやく実を結びました。

今後の取り組み

アユは1年で一生を終える年魚であり、稚仔魚期の海の環境によって生残率が大きく変動する魚種であるため、ある年の遡上量が多かったとしても、翌年の遡上量が多くなるとは限りません。河川漁業の主役であるアユ資源の安定化には、十分な産卵量を確保するための親魚保護や、種苗放流による資源増殖の取組が欠かせません。令和2年には県内放流アユの生産拠点として、江川漁業協同組合のアユ種苗生産施設が更新され、400万尾以上の種苗生産体制が整備されました。また、同生産施設では、県内産天然アユを親魚とする生産に向けた準備も進んでいます。島根県水産技術センターでは、引き続きアユ資源に関するフィールド調査とともに、種苗生産・放流に関する調査研究・技術指導について取り組む予定です。

島根県水産技術センター 島根県浜田市瀬戸ヶ島町 25-1

TEL:(0855)22-1720 FAX:(0855)23-2079

ホームページ: <https://www.pref.shimane.lg.jp/suigi/> →

E-mail: suigi@pref.shimane.lg.jp

